

けしの圃

小川未明

青空文庫

旅たびから旅たびへ渡わたつて歩あるく、父ちちと子この乞食こじきがありました。父親ちちおやは黙だまりがちに先さきに立たつて歩あるきます。後あとから十じゅうになつた小太郎こたろうはついていきました。

彼かれらは、いろいろの村むらを通とおりました。水車小屋すいしやこやがあつて、そこに、ギイコトン、ギイコトンといつて、米こめをついているところもありました。また、青葉あおばの間あいだから旗はたが見みえて、太鼓たいこの音おとなどが聞きこえて春祭はるまつりのある村むらもありました。またあるところでは、同じ街道おなじかいどうを曲馬師きよくばしの一隊たいが、そろそろと馬うまに荷物にもつをつけて、女おんなや男おとこがおもしろそうな話はなをしながらいくのにも出であいました。そうかと思うと、さびしい細路ほそみちを、二人ふたりは町まちの方ほうへ急いそいでいることもありました。いまにも、降ふつてきそうな、灰色はいいろに曇くもつた空そらを氣きにしながら、父親ちちおやが大おほまたに歩あゆむのを、小太郎こたろうは小さな足あしで追おいかけたのです。けれど小太郎こたろうは、こんなときにでも、圃はたけの中なかに立たっている梅うめの木の葉はの間あいだから、青あおい、青あおい梅うめがのぞいているのを見逃みのがしませんでした。そして、そんな景色けしきを見みると、なんとしたことなく、悲かなしくなつて、自分じぶんには、面影おもかげすら覚えおぼえないお母さんかあのことなどが思おもひ出だされて涙なみだが出るほどでありました。

「お父さんとう、私わたしのお母さんかあは？」と、小太郎こたろうは父ちちに聞ききますと、

「おまえには、母親^{ははおや}なんかいないのだ。」と、父親^{ちちおや}は答えました。

「そんなら、私^{わたし}のお母^{かあ}さんは、死^しんでしまったの？」

「うるさいってことよ。ああ、そうだ。死^しんだんだよ。」と、父親^{ちちおや}はどくなりました。

子供^{こども}は、付き場^{つきば}がなく、小さな胸^{むね}をわななかせて黙^{だま}ってしまうのでありました。

村^{むら}や、町^{まち}を歩きまわって、たくさんお金^{かね}をもらってきたときは、父親^{ちちおや}は機嫌^{きげん}がよろこ

ぎいましたけれど、もし、少なかつたときは、口^{くち}先^{さき}をとがらして、

「やい、この盲目^{めくら}め、これんばかり働^{はたら}いてきてどうするんだ。ここらあたりへ捨^すてていつ

てしまふぞ。」とどくなりました。そして、小太郎^{こたろう}の差^さし出した手^てから、お金^{かね}をひつたくる

ように奪^{うば}い取^とるのでありました。

小太郎^{こたろう}は、すぐ目^めでありました。自分^{じぶん}にもあまり覚え^{おぼ}のない時分^{じぶん}に、どうして片方^{かたほう}の

目^めをつぶしてしまったのかわかりません。

あるとき、こんなことがありました。それはなんでも北^{きた}の方^{ほう}で、青い海^{あおうみ}の見^みえる町^{まち}であ

りました。町^{まち}といつても家数^{いえかず}の少ない小^{ちい}さなさびしい町^{まち}で、魚問屋^{さかなどいや}や、呉服屋^{ごふくや}や、荒

物屋^{ものや}や、いろんな商^{しょう}店^{てん}がありました。いちばん魚問屋^{さかなどいや}が多くあつて、町全^{まちぜん}体^{たい}

が魚^{さかな}臭^{くさ}い空^{くう}気^きに包^{つつ}まれていました。その町^{まち}の木賃宿^{きちんやど}に泊^とまつたときに、父親^{ちちおや}は、

子供を、知らぬ男と女の前に出して、なにかいっていました。

その話は、よく小太郎にはわからなかったけれど、知らぬ男と女に、小太郎をくれてやるといふような話らしかったのです。小太郎は、なんとなく心細くなつて泣きたくありませんでした。そして、はたしてそれはほんとうに父がそう思っているのだろうかと思ひ向いて父親の顔をじつと見つめました。ちようど、そのとき、知らぬ女が、

「だって、この子はいれ目じやないかね。いくらなんぼでも役にたたない。」といひました。つづいて、知らぬ男が、しやがれ声でなにかいひました。

「さあ、あちらへいこう。」と、父親は、急に小太郎の手を取りました。小太郎は、やはり自分は父親とは離れることがないのだと思うと、急に気がゆるんで一時に熱い涙がほおに伝わりました。

それから、その暗い宿を立つて、また松原の中の小路を歩いて、つぎの町の方へと二人はいきました。

小太郎は、歩きながらいろいろなことを空想しました。いつも父親に気に入らないことがあるたびにひどくいじめられるよりは、あの女の人のところへ、もらわれていったら、あの女の人は、自分をかわいがってくれなからうか。けれど、あのしやがれ声の男の

人は怖い。などと思ひました。また、小太郎は、女の人がいった言葉を思ひ出しました。「いくら、なんぼでも……。」と、女の人はいったが、なんぼとは、どういう意味のことだろうと考えました。小太郎には、女の人はいったことが心にはつきりわからなかったのであります。

「お父さん、さっきの女の人とは、どこの人なの？」と、小太郎は父親に聞きました。「西国のもので、俺は知らねえ。」と、父親は答えました。

その後、父親は小太郎の入れ目を取り出して捨ててしまいました。いままでかわいらしい、美しかった少年の顔は、急に醜いものとなってしまいました。けれど、その方がかえって、見る人々からかわいそうだといわれて、お金をたくさんもらえることと父親は思つたのです。

ある日の暮れ方、二人は町に入りました。この町はいままで見たほかのどの町よりも、なんとなく気持ちのいい町でありました。ちょうど幾台となしに、馬が荷車を引いて、ガラガラと町の中を通つてあちらへいくのを見ました。

一軒の酒屋の前へきかかりますと、父親は小太郎に向かつて、「おまえは向こうの角に待つていれ。」といいました。父親は酒が好きで、よくこうし

て、待たされたことがありますので、小太郎はうなずいて、町の角に立つて、馬の通るのをながめていました。そのうちに、長い馬の列はいつてしまいました。けれど、まだ父親の出てくるようすが見えませんでした。小太郎は、父親はどうしたのだろうと思つて、酒屋の入り口に立つて、うす暗い内をのぞきました。しかしそこには、父親のいるけはいもなければ、また人の話し声もしませんでした。

「お父さん、お父さん。」と、小太郎は、急に心細くなつて泣き声を出して、父を呼びました。けれど、なんの返答もありません。その内に番頭が顔を出して、

「だれも、家にはきていない。」といいました。小太郎は、父は、もう先にいつてしまったのかと思つて、後を追うために駆け出しました。

いくら駆けても、父の姿を見いだすことはできませんでした。小太郎は、父が、たしかに、あの町の角で待つていれといったことを思ひうかべて、自分をひとり置き残して、どこかへいつてしまはずがなかと考えました。そして、いまごろは、父があの町の角で、自分を捜してはいしまいかと思うと、また酒屋の前までもどつてきました。けれど、そこにも、ついに父の姿を見いだすことはできませんでした。

「これは、きつと自分を置いて、お父さんはどこか遠いところへいつてしまったのだ。」

と、小太郎は思いました。

彼は、あてなく、いなくなつた父親をたずねて町の中を歩きまわりました。そのうちにだんだん日が暮れてきて、歩いている人の顔がぼんやりとしてわからなくなりました。とうとう小太郎は、足が疲れ、腹がすいて、町はずれにさしかかったとき、倒れてしまいました。

小太郎は、ぼんやりとして、西の空に沈んでしまった入り日のあとが、わずかばかり赤くなっているのをながめていました。すると、ちょうどこのとき、町はずれに流れている河がありました。その橋を渡つて、つえをつきながらきかかるおばあさんがありました。おばあさんは腰が曲がっていました。そして、黒い頭巾をかぶっていました。おばあさんは、小太郎の倒れているそばを通りかかろうとしまして、そこに子供の寝ているのを見てびつくりいたしました。

「かわいそうに。」といって、おばあさんは、どうしてこんなところに寝ているのかと聞きました。

小太郎は、お父さんがいなくなつたのをくわしく物語りました。おばあさんは、小太郎の話の一部始終聞き終わると、

「わたしは、この町に昔から住んでいる占いで。やはり私の見た占いが当たっていた。この町を出て二、三丁向こうへいくと、大きな屋敷がある。そのまわりを石垣で取り巻いてる。おまえは、ここにあるこの笛を吹いて、その石垣の石をかぞえながら、今夜の中に、その屋敷のまわりを一まわりすると、おまえのまだ知らない、ほんとうのお母さんにあうことができる。」と、黒い頭巾をかぶったおばあさんはいいました。

小太郎は、ほんとうのお母さんに、今夜あわれるということを聞くと、いままでの悲しいことも、また腹の減ったことも、疲れたこともすっかり忘れてしまいました。そして、勇気づいて、急に飛び上がりました。おばあさんの教えてくれた方に走っていこうとしますと、おばあさんは、小太郎を呼び止めました。

「この笛を吹くことを忘れてはならん。さあ、この笛を持って行って、石垣の石を一つずつ数えながら五つ数えてはこの笛を吹き、十数えてはこの笛を吹くのだ。」と行って、たもとから四つか五つの子供の吹く、おもちゃの笛を取り出して、小太郎に渡しました。小太郎は、よほどきてから、向こうから歩いてくる人に、

「このあたりの、石垣のある大きな屋敷は、どこでしょうか。」と、聞きました。

「ああ、あの女のきちがいにいる大きな屋敷ならもうじきですよ。」と、その人はいいま

した。

小太郎は、その屋敷には、きちがいがいるのだらうかとびっくりしました。けれど、なににしてもお母さんにあえるといううれしさで、歩いてきますと、なるほど、大きな屋敷がありました。

屋敷は、石垣で取り巻いていて、その内側には、こんもりとした樹がしげつていました。夜が更けるにつれて、あたりはひっそりとなりました。月が上がって、青白く、野原も路も彩ったのであります。小太郎はおばあさんからもらった笛を吹きながら、石垣の石を一つずつ数えて屋敷をまわりました。

屋敷の周囲には、広々とした圃がありました。そして、そこにはばらの花や、けしの花が、いまを盛りに咲き乱れているのであります。なんともいえない、なつかしいいい香りが夜の空氣にしみ渡っているのにつけて、小太郎はほんとうのお母さんを思い出しました。そして、石を数えては、また笛を吹きながら屋敷の外側を歩いていました。

すると、向こうに、ぼんやりとして人影が動いたような気がしました。小太郎は、だれだろうと思いました。なんでも、その人影は笛の音をいっしょうけんめいに聞いていますようでありました。小太郎が笛を吹くと、その影は、動いてだんだんこっちに近づいて

くるようであります。

「三百八十六。」と、小太郎は石を数えて、また笛を吹き鳴らしました。その音色は、細く、悲しく、夜のあたりに響いたのです。響いたかと思うと、はかなく、跡なく消えてゆきました。そのときだんだん人影は、こちらに近づきました。小太郎は、だれか、自分をしかるのではなからうかと思いました。けれどその影は、穏やかに動いて、そんなけはいもなく、なんとなく笛の音を聞いては、こちらを遠くから、透かして見ているようでありました。

だんだんその影が近づきますと、それは女の影であることがわかりました。美しい女が、髪を垂れて、月の光を浴びてたらずみながら、ぼんやりとこちらを見つめているようすであります。小太郎はもしやこの女の人が、自分のほんとうのお母さんではなからうかと思いました。そして、占い者のおばあさんが、今夜、おまえはほんとうのお母さんにあえるといったことを思い出して、なんとなく小太郎の胸は躍ったのであります。

小太郎は、躍る胸を心で押さえながら、また石を数えて、「三百八十九。」といって、笛を鳴らしました。

このとき、美しい女は、けしの咲いている圃の中を走って小太郎に近づきました。

「小太郎じやないか。」と、美しい女の人はいました。

小太郎は、自分の名を呼ばれたので、びっくりしました。急には、返事ができなくて、黙って、立って女の姿を見守っていますと、

「おまえは、小太郎じやないか。」と、なつかしい声で、二度呼びかけられたので、小太郎は、自分を忘れて、

「あなたは、お母さんですか。」といって、女の人に飛びつきました。

「どうして、よくおまえはかえってきておくれだ。おまえがいなくなった日から、私は、幾年の間毎晩、ここに立っておまえの帰るのを待つていたかしれない。ちょうどおまえが四つの夏の日だった。やはりこうして笛を吹いて、門の外に出たかと思うと、いつのまにかおまえの姿が見えなくなつた。おまえの帯にはお守り袋がついていて、それに名まえが書いてあるから、迷つたならだれか連れてきてくれるだろうと思つたが、それぎりついに帰つてこなかつた。きつと、人さらいに連れられていつてしまったものと思つたが、私は、その日から、病氣になつてしまつて、明け暮れおまえの身の上ばかり案じていた。おまえは子供の時分に片方の目がいけなくて入れ目をしていたが、ほんとうの小太郎なら目が悪いはずだ。」といつて、女の人は小太郎の顔を見ました。

小太郎は、いつか父親が怒つて、悪い方の目から、入れ目を掘り出して、どこかへ捨ててしまつてから、まったくふさがつて醜くなつていましたので、母親は見えてびっくりしましたが、まさしく自分の子供であることがわかつて、家の中へつれて入りました。家の中はりっぱでした。乞食をして歩いてゐた小太郎は、かつてこんなりっぱな家を見たことがありませんでした。小太郎は、はじめて姉や、妹にもあい、また、ほんとうのお父さんにもあうことができました。

その日から、小太郎は、なに不足のない生活を送りましたが、ときどき、乞食の父親を思い出して、いまごろは、どうしているだろうと思うと、いい知れぬ悲しさを覚えて涙ぐんだのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」

1920（大正9）年7月

※表題は底本では、「けしの圃《はたけ》」となっています。

※初出時の表題は「罌粟の圃」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

けしの圃

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>